

令和3年度メルマガみやぎ 日本遺産特集 バックナンバー

令和3年度

※特集タイトルをクリックすると、読みたい記事にジャンプします。

No.	配信日	特集タイトル
1	令和3年 4月 9日 (金)	<a href="#">構成文化財・松島の風景を眺める場所</a>
2	令和3年 7月30日 (金)	<a href="#">構成文化財・国指定名勝おくのほそ道の風景地</a>
3	令和3年 9月24日 (金)	<a href="#">江戸時代以来の伝統を誇る工芸品・仙台筆筍</a>
4	令和3年11月26日 (金)	<a href="#">日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はじめりの地をたどる— みちのく山</a>
5	令和4年 1月28日 (金)	<a href="#">日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はじめりの地をたどる— 紺紙金泥大般若経 (こんしこんでいはいはんにやきょう)</a>
6	令和4年 3月25日 (金)	<a href="#">日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はじめりの地をたどる— モンスターゴールドの謎</a>

## ■ 1 構成文化財・松島の風景を眺める場所 ■

---

日本三景の一つである松島は、江戸時代に仙台藩によって保護されました。特に日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」に認定されている松島町・塩釜市には、多くの構成文化財が残っています。日本遺産に認定される以前の昭和28年には「我が国にとって芸術上また又は観賞上特に価値の高いもの」として、“特別名勝”という文化財に指定されました。なお、この特別名勝とは、よく耳にする“国宝”と同じ価値をもちます。

仙台藩歴代藩主は松島の風景をととても大切にしており、松島湾各地で美しい風景を楽しみました。海に突き出た岬や崖の上には、観瀾亭（かんらんてい：松島町）や勝画楼（しょうがろう：塩釜市）といった、藩主が宿泊や休憩した御仮屋が現在でも残っているほか、御殿崎（七ヶ浜町）などの地名が今でも伝わっています。

時代が下ると、松島の風景を岬や崖よりも高いところから眺め始めます。江戸時代後期の仙台藩儒学者・舟山萬年は、著書「塩松勝譜（えんしょうしょうふ）」で松島の風景が最もよく見られる場所として、多聞山（七ヶ浜町）、扇谷・富山（共に松島町）、大高森（東松島市）を紹介し、これが松島四大観として現在に伝わります。明治時代以降になると、富山は俳人正岡子規、観瀾亭には建築家ブルーノ・タウトが訪れました。

現在、松島の風景を眺める展望地点は20カ所以上になります。観瀾亭や松島四大観など、こうした歴史のある眺めを味わってみてはいかがでしょうか。

（松島湾の展望台は宮城県教育委員会「特別名勝松島保存管理計画」で位置を紹介しています）

## ■ 2 構成文化財・国指定名勝おくのほそ道の風景地 ■

---

元禄二年（1689年5月6日（元禄二年）旧暦三月二十七日）（陽暦五月六日）、俳人・松尾芭蕉（1644～1694）は弟子の曾良（そら）と共に、江戸・深川から歌枕を訪ねる旅に出ました。芭蕉はこの旅で県内の松島、石巻、大崎などを訪れています。後年、この旅をまとめた紀行文が『おくのほそ道』です。

仙台藩の初代藩主・伊達政宗公は歌枕への造詣が深く研究熱心で、それは歴代藩主にも引き継がれていきました。藩は古典研究や名所旧跡の調査を行ない、歌枕の地の比定と顕彰に取り組んだそうです。多賀城碑（重要文化財・多賀城市）はその中の一つで、寛文年間（1661～73）頃に発見、すぐに歌枕の壺碑（つぼのいしぶみ）として広まります。芭蕉の旅の動機は、仙台藩の調査研究の成果が影

響したのではないでしょうか。

芭蕉の『おくのほそ道』が世間に広まった後、4代綱村公の頃に、県内で「歌枕」とされた場所は積極的な整備と保護が行われました。壺碑には覆屋（おおいや）がつくられ、興井（おきのい）では八幡村肝入の家を「奥井守」に任じています。

仙台藩が調査研究し、芭蕉が『おくのほそ道』で広め、また藩が保護した「歌枕」。現在、国指定名勝「おくのほそ道の風景地」として、芭蕉が訪ねた頃の面影が守られています。また、平成28年には仙台藩の文化を示すものとして「木の下・薬師堂・つゝじが岡・天神の御社（仙台市）」や「末の松山・壺碑・興井（多賀城市）」、「籬が島（塩釜市）」が日本遺産に認定されました。これらの場所を巡り、で芭蕉が旅した当時の面影を感じてみてはいかがでしょうか。

### ■ 3 江戸時代以来の伝統を誇る工芸品・仙台筆筒 ■

今回は、日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」構成文化財のひとつである仙台筆筒（せんだいたんす）を紹介しましょう。

仙台筆筒は、仙台藩の御用職人の工芸技術が城下の職人に伝えられたといわれる、江戸時代以来の伝統を誇る工芸品です。江戸時代の末頃から、指物（さしもの）・漆塗り・金具の職人による分業で製作され、今に至っています。

指物とは木材を組んで箱にする技術で、筆筒の全面にはケヤキやクリなど木目がはっきりした木材、抽斗にはスギやキリなど、あたたかみのある木材が使用されました。三枚組（さんまいぐみ）や五枚組（ごまいぐみ）といった伝統的な木材の組み立て方で、釘を使わずに木材と木材を組み合わせます。また戸板は、木材にくるいやねじれが起きにくいよう反り止めといわれる細工が施されます。

漆塗りは、木目の美しさが際立つように木地呂（きじろ）塗りという技法が用いられます。この技法は、鏡面のような仕上がりで強度を保ち、天然素材の漆の特性が活かされています。赤黒い色合いで、長い年月を経て木目がより鮮明になり、その変化を楽しむことができます。

金具は、主に鉄材を用い、鑿（たがね）で一本一本の線を打ち付ける打ち出しと呼ばれる技法で作られています。主なモチーフとして龍や唐獅子（からじし）、牡丹（ぼたん）など大きく見映えのする鍔金具（かざりかなぐ）が仙台筆筒に取り付けられています。

このように3つの熟練した職人技によって生み出された仙台筆筒は、明治時代から大正時代にかけて宮城の生活文化として定着していくとともに、海外に輸出されるほど需要が大きくなりました。戦後、生活様式の変化に伴い、仙台筆筒のような大型の筆筒は需要が少なくなりましたが、この貴重な伝統文化を守

っていきたいという関係者の努力により、平成27年6月に国の伝統的工芸品に指定されました。

仙台筆筒歴史工芸館では、江戸時代から現代にいたるまで製作された仙台筆筒が展示されています。

#### ■ 4 日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はじめりの地をたどる— みちのく山 ■

---

今から約1,250年前、日本で初めて黄金が見みつけた宮城県。奈良の都の人びとは、遠い北の果て「みちのく」にある黄金を産出した山を、神仏の加護によりが産出に結びついた聖地と捉とらえました。万葉の歌人・大伴家持（おおとものやかもち）は、「すめろきの、御代（みよ）栄（さか）えむと、東（あずま）なる、みちのく山（やま）に金（くがね）花咲（はなさ）く」（万葉集巻18、4097）と万葉最北の歌を詠んでいます。

仙台から車で1時間、涌谷町から大崎市田尻にかけて東西に峰が連なる篁岳（ののだけ）丘陵が、約1,250年前に聖地となった「みちのく山」です。奈良時代末、山は山岳信仰と結びつき、「みちのくに安泰をもたらす聖地」と認識されるようになりました。

丘陵東端の峰の上に建たつ天台宗の一山寺院「篁峯寺（こんぼうじ）」は、平安時代に創建されてから現在に至るまで山頂を「殺生禁断」の聖域として法灯を護り続けています。県内最大級の密教堂である「観音堂」（宮城県指定文化財）には「奥州鎮護」と書かれた巨大な額が掲げられ、地域からは「ののだけさま」と呼ばれて、民謡「秋の山唄」とともに里山の安定を願う聖地として親しまれています。山頂からは、宮城県北の山々や田園風景が一望できますので、皆さんぜひドライブにお出掛けください。

#### ■ 5 日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はじめりの地をたどる— 紺紙金泥大般若経（こんしこんでいはいはんにやきょう） ■

---

令和のいま、日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」では金そのものだけでなく独自の文化や信仰、産業へと発展した新たな金の魅力を掘り起こし中です。今回は、宮城県指定有形文化財「紺紙金泥大般若経（こんしこんでいはいはんにやきょう）」を紹介します。

これは、南三陸町志津川の袖浜地区にある荒澤神社に伝わる社宝で、「紺紙」という字のとおり、紺色に染められた紙に金で文字が書かれたお経です。文字だけでなく、表紙の裏側にあたる見返しと呼ばれる部分には金と銀で、施眼（げん

せ)と剃髪(ていはつ)の様子が描かれ、現世や来世の幸福をもたらすための善い行いを表しています。平泉に残る通称“中尊寺経”と呼ばれる紺紙金泥一切経の一巻と考えられ、奥州藤原氏第3代藤原秀衡(ひでひら)が建立したとされる田束山寂光寺(たつがねさんじゃっこうじ)から伝わってきたとする言い伝えがあり、平泉の黄金文化を象徴するものの一つです。

そもそも一切経とは仏教のお経全巻をまとめたもので、つくるためには大量の紙と時間が必要でした。これに加えて、一切経を金字で書く中尊寺経を作るには莫大な財力も必須。これらを支えたのが北上産地や三陸沿岸地域で採れたみちのくの金だったのです。

キラキラと輝く金と他にはない装飾性の高さなど、その美しさや特別感に今も昔も多くの人々が魅了されてきました。現在は、将来への継承に向けて公開しておりませんが、いずれ現代版「黄金の国、ジパング」を体感しにきてください。

## ■ 6 日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はいまりの地をたどる— モンスターゴールドの謎 ■

---

司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』に登場する「モンスターゴールド」をご存じでしょうか。

最新技術の導入により各地で大規模な金鉱山開発が進んだ明治時代、日本では空前のゴールドラッシュが起きました。その熱気の中、明治 37 (1904) 年に気仙沼市北部の鹿折金山で、産出されたのが、重さ 2.25 キログラムの鉱石の中に金が約 83% (1.875 キログラム) も含まれた自然金の塊「モンスターゴールド」が産出されます。です。鉱脈からこれほど大きな自然金が産出されるのは世界的にも珍しく、同年開催の米セントルイス万国博覧会(アメリカ)に出品されました。その巨大さと輝きは世界を驚嘆させ、「ナゲット・モンスター(怪物金)」として青銅メダルを受賞しています。黄金の国ジパングの底力を世界に示したと言えましょう。現在、鹿折金山資料館にはそれを記念した大賞状が飾られています。

そんなモンスターゴールドには、いまだに未だ解明されていない大きな謎があります。万国博覧会后、日本に戻ってきた時ときには 6 分の 1 の大きさ(約 362 グラム)になっていたのです。では 6 分の 5 はどうなったのか。前述の『坂の上の雲』では高橋是清が日露戦争の軍費に充てたとされしていますが、真相は分からないままです。小さな金山から発見された金の塊が日本の歴史を動かしたかもしれません。

現在、モンスターゴールドは茨城県つくば市の産業技術総合研究所地質標本館で展示されています。